



月影兵庫

上段霞切り

南條範夫



東京文芸社

月影兵庫

―上段霞切り―

四三〇円

無
検
印

承
認

昭和四十二年三月一日印刷
昭和四十二年三月五日発行

著作者 南條範夫
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(三〇)二五五〇

月影兵庫

—上段霞切り—

目次

上段霞切り	五
駕籠の中の美女	一八
雲助悲願	三
通り魔嫌疑	四
美しき悪女	六
剣士好色	九
閑所破り	八
怒れる天狗面	五
魔薬の魅惑	一〇八
順礼姉妹	一二
幽霊侍の秘密	一三五
色魔奉行	一四九

女人厭世

一六二

血染めの旅籠

一六六

河上の乱闘

一六九

首のない死体

二〇二

尻をまくつた幽霊

二一六

二人の十太夫

二二〇

斬られた月影

二四三

狂い咲き

二五五

剣士女難

二七〇

十剣無統流

二八四

華麗な牢獄

二九七

消えた綾姫

三二〇

五色の川

三三三

装
幀

村
上

豊

上段霞切り

一

いつもなら、体じゅう、もりもりと盛りあがるような感じで、颯爽と歩いている兵庫なのだが、今夜は、ひどく元気がない。

義理の伯父松平伊豆守信明の下屋敷に向かつて、足だけは運んでいるものの、全然、気が進まないのである。

父吉左衛門の叱責には、てこでも動かなかった兵庫だが、母の藤乃の泣きおとしにかかつて、しぶぶ出かけてきたのだ。

「二千石の家禄は、森之助が継ぐのだ。お前には、何もやるものはない。信明殿に頼みこんで、よい養子口をみつけてやろうと言うのに、何が、不足なのだ、罰あたりめ」

と、吉左衛門は、苦りきっていた。

「お前ほどの腕を持ちながら、いつまでも、部屋住みでは、わたしが見ていられませぬ。伯父さまに願って、世に出る途を考えてたもれ」

と、藤乃は、仏壇の前で、涙を流した。

——いやなこった、どうせ不器量な権式ばかり高い売れ残り娘の尻にしかれて、三百石か、五百石の端米^{はしなまい}に一生縛られてたまるものか。

兵庫は、無条件に、反撥を感じていた。食ってゆくくらい、兄貴の世話にならなくても、立派にやってみせる、という自信もあった。

ただ、幼い時から、なぜか、実直な父に似た兄よりも、気ままで乱暴な自分を、偏愛し、父や兄と争ってまで庇ってくれた母の涙に負けて、出てきただけなのだ。

——伯父の、もったいぶった老中づらなぞ見たくもないが、顔出だけはしておかなければならぬ。

空に向かつて、睡でも吐きかけたいような気持で、つんと上を向くと、暮れてまもない空に、蒼白く弦のように新月がかかっていた。

——ちえっ、月まで、人を馬鹿にして澄ましてやる。

何もかも、おもしろくない。思いきり、両腕をぶんまわして、何かを叩きのめしてやったら、気がカラッとするかもしれぬ。

五尺七寸の大きなからだに似合わぬ子供っぽい顔が、目にみえない何かに向かつて、くしゃくしゃと、しかめつらをしてみせた時、前方に、数名の足音の乱れるのが、聞こえた。

二三十間先の、大名邸の角を曲がって、一挺の女駕籠が、飛ぶように走ってくる。

その駕籠の脇にそって、あえぎあえぎ走っていたお高祖頭巾の女が、つと体をよけた、兵庫の姿を目にとめると、

「もし、お見かけ申してお願いいたします、悪者たちに追われております、お助けくださいませ」
藁をも掴む——といった感じの声だった。

「はあ、さようか」

はなはだ、のんびりした答をしたが、兵庫の体からは、つい今し方までの、なげ出したような緩み

が消しとんで、駕籠の走り去っていった後の路上に、がっしりと立ちはだかった。前方の邸の角のところから、三人の男が、前かがみになって、疾走してくるのを認めたからである。

「のけッ」

先頭の男が、兵庫にぶつかりそうになって、どなった。

「いやだ」

「うぬッ」

睨みつけたが、気がせくのか、横手をすり抜けようとするのを、ポンと突き飛ばされて、

「こやつ、邪魔する気か」

「こやつ、邪魔する気だ」

「ぶった斬るぞ」

「ぶった斬ってみろ」

「くそッ」

二番目の男、よほど気短かとみえて、いきなり抜打ちに斬りかかってくるのを、手刀で下から上にしたたかにはね上げ、刀をとばした。

「あっ」

三番目の、がっしりした男が、前に出た。この中ではどうやら一番できるらしい。

「なぜ、さまたげする」

「頼まれたのだ」

「牧野殿の手のものか」

「そんなもの知らぬ」

「ならば、のけ、一刻を争う天下の大事なのだ」

「女駕籠を追いかけるのが、天下の大事とは解せぬ」

「うぬらの知ったことでない、まごまごすると、ただでおかぬぞ」

「何とでもしてみろ」

「ばかめッ、心形刀流の斬味みたいか」

「みたいな」

先の男のように即座に斬ってかかるうとはせず、兵庫の構えを、じっとみてとっているのは、相当な遣い手に違いない。兵庫の頬が、大きくこぼれるように笑って、

「どうした、おれの方から十剣無統流の斬味みせてやろうか」

「十剣無統流？ 聞いたこともない流儀だ」

「たった今、聞かしてやったはずだ」

「うぬ、抜け！」

相手が一歩さがって、大刀の鞘を走らせたときみえた時には、兵庫の手にも、自慢の業物越前守助広が抜き放たれていた。

「名前を聞かせてやっただけでは分かるまい。十剣無統流の早技もみせてやろう」

「言わしておけば——」

「高言ぬかす——と思ったら、遠慮なく斬ってかかれ」

あきらかに、腕は桁違いだった。

相手の男も、それが分かるだけ、できぬ方ではないのだが、越前守助広の氷のような刃影に、完全に圧倒されてしまっているのだ。

「しつかりしろ、心形刀流。こちらから先に、斬味おみせしようか」

と言った言葉の終わらぬうちに、相手の頭上を、越前守助広が、電光のように横にないだ。その刃の先から怪鳥のごとく、パッと空に舞いあがったものがある。

それを、左手で空中に受けとめた兵庫が、

「上段霞切り——ただし、見本だ。それ、これがお土産」

ポンと、手にしたものを投げつけた。あわてて、頭を押さえた相手が、

「あつ、鬚——」

「首でないのをありがたいと思え」

パチリと刃を納めると、ふたたび、にこつと頬を大きくくずして、

「もう、駕籠も、だいお行つただろう、間に合うと思つたら、追ってみろ」

そのまま、ふりむきもせず、大きな肩をゆすつて、兵庫は、歩きだしていた。

二

参州吉田七万石の城主松平伊豆守信明は、寛永の名宰相松平信綱七代の孫、文化三年以来老中上座として、將軍家斉の信任すこぶる厚い。

嵩岳君言行録に

人となり明眸白皙、長身肥美にして言語明晰、人皆望みて之を畏れ、世に小知恵伊豆と称す
とある。

この年文化十三年、すでに齡五十の坂を越え、往年の美貌やや衰えたりとはいへ、堂々たる貫禄が加わつて、あつばれな老中面であつた。

その堂々たる老中づらが、この夜ばかりは、いささか焦慮と狼狽とにゆがんで、声もとげとげしく、

「どうした、宗像は、まだ戻らぬか、岡島は、何をしておる！」

と、五分おきくらいに、侍臣を叱りつけているのである。その険しい気色をちらと上目でうかがつて、用人宇合勘之進が、

「只今、月影兵庫どのがまいっておりますが——今宵お約束とか」

追いかえしましうか、という意味を言外に含ませて言った。

「おう、兵庫がきたか、——よし、すぐにここに通せ」

門前払いを食わせてくれればありがたいの氣持で案内を乞うたのに、

「急いで、奥へ」

と言われて、兵庫、少々見当が違った様子で、奥座敷へ通った。

「兵庫、よいところへきた」

「はっ」

この伯父が、こんなことを言ったのは、はじめてである。いつもは、苦虫をかみつぶしたようなしぶい顔で睨みつけ、のっけから、文句を言いだすのだ。

「一大事が起きたのだ」

「はっ、一大事——今夜は、これで二度目です」

「なにッ」

「伯父上、うるわしき御尊顔を拝し——」

「挨拶なぞどうでもよい、手を貸してくれ、一大事なのだ」

「はあ、いかがいたしました」

「綾姫が、逃げたのだ」

「綾姫と申しますと——」

「綾姫を知らぬか、綾姫を——うむ、お前は知らなかったかもしれない、実は、こういうわけなのだ」
よそ目には、將軍家の信任絶大、老中上座の地位揺ぎなしと見えていても、その地位を保持してゆくためには、なみなみならぬ苦心がいろいろあった。

將軍の気をそねたが最後、いかに有能な重臣といえども、万事休すだ。したがって、歴代の老中、若年寄以下、いずれも、汲々として、將軍のお氣に入ろうとつとめる。

硬骨も、剛直も、將軍の最後の怒りを招かぬ範圍だけのこと、御機嫌とりのためなら、何でもやってのける。

將軍が学問好きなら、鉢巻しても漢書をよまねばならぬし、犬が好きなら天下の野良犬を絹ぶとんに乗せてお犬様と奉るし、歌舞音曲が好きなら、あたら武士が芸事にうつつを抜かす。

が、ありがたいことには、たいていの將軍は、何よりも女が好きだ。ほかにする事がないから、もっぱら女色に精を出すことになる。

ことに当代の將軍家斉ときは、始祖家康以来、拔群の女好きで、すでにこの年までに、側室をおくこと六十八人、子供を生ますこと四十一人、いまだ、いささかも倦怠の色をみせない。

したがって將軍にとり入るには、美女を献ずるのが、もっとも効果的である。

老中松平信明、牧野忠精、酒井忠進、おのおの抜目なく、金と力にあかせて、家斉の閨房のいけにえを献じてきた。

その大部分は、旗本の娘だが、このころになって、將軍が、公卿の姫を試食したいという意向をも

らした。

三人の老中、直ちに、京へ人を派して、公卿の娘を総ざらいにあたつて、おのおのこれこそはと思ふ姫をみつけ出して、江戸へ連れてきた。しばらく城中の作法を仕込んだ上、自分の養女として献上するつもりである。

中でも、信明の手にいれたのは、去年物故した中山大納言愛親の三女綾姫、美色京洛随一とうたわれに女であつた。

その綾姫が、千代田城へ上る目を目前にひかえて、忽然と姿を消したのである。

中山大納言は名にしおう俊傑、先に寛政五年尊号事件で江戸へくだった時、時の老中松平定信以下を、完膚なきまでにやつつけた型はずれの公卿だ。その血を受けているだけに、綾姫も、將軍の側室などになることを、いさぎよしとしなかったものらしい。

いやだ、いやだと、江戸へくだってからも、さんざんに、信明を手こずらせたが、ついに、大胆にも、この夜侍女萩枝を連れて、脱走したのである。

「女ばかりで書ける筋書ではない。思うに牧野か酒井めが、手をまわして、そそのかしおつたに違いない。萩枝の姫が、牧野の妾をしているとか聞いた」

信明は、綾姫の脱出を、政敵の陰謀ときめてかかっている。

——何のことだ、これが天下の大事か、伯父の保身術の一角が破綻したにすぎないではないか。聞いていた兵庫は、索然たる面持になった。相手が他のものなら、例の

——はあ、さようか。

と、とぼけた声を出して、そっぽを向くところだが、このさいは殊勝らしく、
「なるほど」

と、うなずいてみせた。ちょうど、その時、縁の外を小走りにかけよった者が、

「殿、宗像十太夫、戻りました」

「おお、どうだ、捕えたか、捕えたか」

信明が、さっと立ちあがって、縁へ出ると、

「残念ながら、取り逃して——」

「ばかッ」

一喝した信明が、平伏した男の頭を見て、

「宗像、その頭は、何だッ」

「はっ、これは——」

頭を上げた拍子に、信明の背後から顔を出した兵庫と視線を合わせた。

「やっ、こ、こ、こやっ——」

「あははは、あの駕籠が、綾姫だったのか。や、これは失敗」

兵庫が、明かるい声で、おもしろそうに笑ったのである。

三

明け方の風は、もう、かなり冷たい。宮益坂の頂きに立って見渡すと、目黒川を越えて道玄坂、その左右は一带に広い田畑、垂れ穂の波の中に、つぶれかかったような農家が、数軒ちらばっているだけだ。

渋谷村の高台一带を、足を棒にして、一夜中歩きまわった五人は、空っ腹に、その冷たい空気を吸いこんで、疲労と睡気といまいましたと、お互いに噛みつきそうな視線をかわした。

兵庫と、宗像十太夫とは、すでに読者の知っているところだ。

第三の男は、岡島忠衛門。気の小さそうな神経質な顔に、やや偏執狂的な目を、ひっきりなしに、ばちばちさせている。

第四の男は、黒祖父左京。削ぎおとしたようにこけた頬の上に、眼窩がごぼっと凹んで、薄気味悪い瞳が、蛇のように光っている。

五人目は——男ではない。綾姫の顔を知っているので首実験のためつけられた桔梗という二十一、二の奥女中である。高髻の島田が、白い輪郭のはっきりした顔によく似合っているが、女にはきびしすぎる鋭い気性が、眉宇の間にあふれていた。

五人が五人とも、前夜、信明に殿命されて、失踪した綾姫の行方探索に、夜を徹してしまったのである。

明け方までかかって、どうやら綾姫の駕籠が、仙石讃岐守邸にそって南へ折れ、金王八幡宮の境内にはいったらしいことを、つきとめることができた。

「境内にある東福寺が、くさい」

と、睨んだが、うかつに足を入れることはできない。

寺社奉行脇坂淡路守は、信明の政敵牧野忠精の腹心である。へまなことをしては、信明の政治的生命に疵がつく。

「いつまで、ここで論じ合っている、どうにもなりません、私が見張っておりますから、早く、殿さまに知らせてください」

桔梗が、不眠のためにはれぼったくなつたため、奇妙な艶っぽさをみせている瞳に、焦慮の色を走らせて、うながした。